

## 人文・社会系

考古学の視点から、アンデス文明における  
権力の誕生過程を解明

国立民族学博物館先端人類科学研究部教授 関 雄二

## 【研究の背景】

アンデス文明とは、15世紀の前半、スペインによってインカ帝国が滅亡するまで、南米の太平洋岸（ペルーとボリビアの一部）に栄えた古代文化の総体を指します。とくに農耕定住前後の大規模な祭祀建造物が登場する時期を形成期（前2500年～紀元前後）と呼び、私を含む日本調査団が50年あまり研究の対象としてきました。

## 【研究の成果】

従来の文明形成過程の研究では、食糧基盤を重視する単純なマルクス主義的文明形成論が根強くありました。私たちは、ペルー北高地のコトシュ（1960-1966）、ワカロマ（1979-1989）、クントゥル・ワシ（1988-2002）などの遺跡を発掘する中で、余剰生産力の乏しい状況下でも、大規模な祭祀建造物が築かれた事例をもとに、祭祀にエネルギーが投下されることによっても社会は発展するという新たな仮説モデルを提示しました。

特に、祭祀建造物の改築や更新自体を、余剰生産力の増大や階層の出現を誘発する原動力として位置づけ、「神殿更新」という概念で社会発展過程を説明した点に新鮮味がありました。

ただし、この「神殿更新」説では、祭祀に対する社会構成員の自主的参加を前提にするあまり、権力者の出現などダイナミックな社会変化への視点を欠くことになり、国家などの複合社会の成立との関係が曖昧となりました。

そのため、現在は、「神殿更新」説の発展モデルとして、それぞれの文化の共通項だけでなく、むしろ差異が生じる要因に目を向け、各社会において不平等が生み出され、権力が生まれていく様相に焦点を当てた調査研究を進めています。

具体的には、ペルー北高地の巨大な祭祀遺跡であるパコバンパ遺跡を現地の国立サン・マルコス大学と共同で発掘し、建築の改変過程はもとより、祭祀空間へのアクセス、周辺の地形や景観の利用、凶像などのイデオロギー面と、植物・動物依存体の分析や食性解析、さらには交易を示唆する遺物の同定などから経済面における権力者の介入が確

認できるかどうかの作業を行っています。

その結果、祭祀建造物全体の建築プランが、水源地といった特定の山や、当時の星座の出現場所などを結ぶ線を中心軸として対称的に展開しており、その建築軸も時代ごとにずれるなど、大規模建築における社会的リーダーの計画性が新たに見えてきました。

## 【今後の展望】

今後は、建築軸の設定の基となった地勢・景観や天体の情報を集積させ、祭祀建造物を築いた人々の世界観にせまること、そして神殿域外に存在すると推測される住居址を調査することで、権力を行使する側と行使される側のせめぎあいの証拠を見出したいと考えています。



図1 パコバンパ遺跡遠景



図2 パコバンパ遺跡の発掘風景

## 【交付した科研費】

平成19-20年度 基盤研究(A)「先史アンデス社会における権力の生成過程の研究」

平成14-18年度 基盤研究(S)「先史アンデス社会における文明の形成プロセスの解明」(研究分担者)

研究代表者:加藤泰建